

# ファインスチール



A U T U M N 2008

## CONTENTS 通巻549

### 01 特集

1. ファインスチール普及キャンペーン
2. 塗装めっき鋼板のJIS改正について

### 05 建築設計例

「金属の質量」 設計：前田紀貞、担当：武藤圭太郎／前田紀貞アトリエ級建築士事務所

### 09 板金工事に関する用語集 その6

### 11 建築めぐり

扉を叩いて③ ソレマニエ貴実也

### 13 日本金属サイディング工業会会員のご紹介

北海鋼機

# No.4

社団法人

日本鉄鋼連盟



# 1. ファインスチール

“ファインスチールとうかい”が、平成19年11月～平成20年4月までに実施した「第2回ファインスチールご採用キャンペーン」について、応募いただいたファインスチールを使った施工例の写真を中心にご紹介します（応募総数：141名、うち愛知77名、岐阜44名、三重20名）。

- 主 催：ファインスチールとうかい（愛知県亜鉛鉄板問屋会、三重シートメタル会、岐阜鉄板問屋会）
- 後 援：（社）日本鉄鋼連盟・亜鉛鉄板委員会「ファインスチール普及会」
- 目 的：金属建材は、リサイクル（省資源）・軽量性（耐震）・多様性（オリジナル）などの時代のニーズに最も適した建材にもかかわらず、「カラー鉄板」、「トタン」という旧態依然とした呼称で呼ばれて、イメージ的には昔のままとなっています。そこで、メッキの技術開発や表面塗装の進歩により、飛躍的に成長した新しい時代の製品「ファインスチール」として、イメージを普及促進するために、前回（平成17年10月～平成18年4月）もご好評頂きました「ファインスチールご採用キャンペーン」を実施しました。
- 期 間：平成19年11月1日～平成20年4月30日
- 内 容：①「ファインスチール」を納入する際にキャンペーンステッカーとキャンペーンチラシをお届けしますので、応募シールと完成時の写真を添えてご応募いただきました。  
②ご応募いただいた作品は、デザイン・アイデアにより、厳正なる審査を行い、ファインスチール賞（2名）、優秀賞（9名）、ベストデザイン賞（70名）を贈呈しました。

## ファインスチール賞（2名）



（名古屋市 横井邸）

講評：屋根に銀黒のファインスチールを使用したすっきりとした仕上がり。



（関市 尾上邸）

講評：屋根・壁ともファインスチールを使用、黒で統一された斬新なデザイン。

# 普及キャンペーン

## 優秀賞（9名）



（北名古屋市 伊藤邸）

講評：屋根・壁にシルバーのファインスチールを使い、役物の配色でアクセントをうまくつけている。



（豊田市 福寿院）

講評：山寺の屋根改修、築100年超の歴史的建築物の改修にもファインスチールが利用されている。



（岡崎市 柴田邸）

講評：コーナーに濃色を使いアクセントを効かした家。屋根はファインスチールの成型の自由度を生かしたアーチ形状。



（北名古屋市 金澤邸）

講評：外壁にシルバー・ブルーのフッ素塗装のファインスチールを使用したシンプルモダンな家。



（岩倉市 YAMADA寝具店）

講評：店舗でのファインスチール使用例。アーチの屋根はファインスチールならではの。



（一宮市 北村邸）

講評：下層部外壁にファインスチールを使用し、モノトーンな和風作り。



（一宮市 佐々木邸）

講評：屋根・壁にファインスチールを使用、玄関の木と調和のとれた洒落た別荘風の家。



（名古屋市 安井邸）

講評：屋根・壁ともファインスチールを使い、木との調和を図った柔らかいイメージの仕上がり。



（各務原市 各務原の家）

講評：外壁にファインスチールを使用、四角と四角をあわせた開放感のあるデザイン。

# 2. 塗装めっき鋼板のJIS改正に

平成20年3月20日公示の塗装めっき鋼板JIS規格について、主にファインスチールに関する深い改正点を紹介します。その他の改正点については、原本を確認して下さい。

## 1. 改正の背景

JISマーク表示制度の改正（平成17年10月）、及び近年のコンプライアンス（法令遵守）意識の高まりを受けて、従来の曖昧な表現箇所を明確にすると共に、現行のめっき鋼板JIS規格（平成19年9月公示）、及び最新の市場ニーズを反映させた形で見直しを行いました。

## 2. 対象のJIS規格

JIS番号	名 称
JIS G 3312	塗装溶融亜鉛めっき鋼板及び鋼帯
JIS G 3318	塗装溶融亜鉛-5%アルミニウム合金めっき鋼板及び鋼帯
JIS G 3322	塗装溶融55%アルミニウム-亜鉛合金めっき鋼板及び鋼帯

## 3. 改正ポイント

1. 塗膜の耐久性試験は形式試験として行うことを明確にしました。  
塗膜の耐久性は耐久性試験で評価しますが、最長2,000時間にも及ぶ試験になる場合もあります。  
従来から本試験は受渡しの都度行ってはならず、耐久性に影響を及ぼすような製造条件の変更があった場合などに形式試験として行っていたことを明文化しました。

# ついて (平成20年3月20日公示)

2. 「絞り用」の種類の記事を塗装原板の種類の記事と一対一に対応させました。

## 《改正前》

JIS番号	適用	種類の記事	塗装原板の種類の記事
JIS G 3312	絞り用	CGCD	SGCD 1、SGCD 2、SGCD 3
JIS G 3318	絞り用	CZACD	SZACD 1、SZACD 2、SZACD 3
JIS G 3322	絞り用	CGLCD	SGLCD、SGLCDD

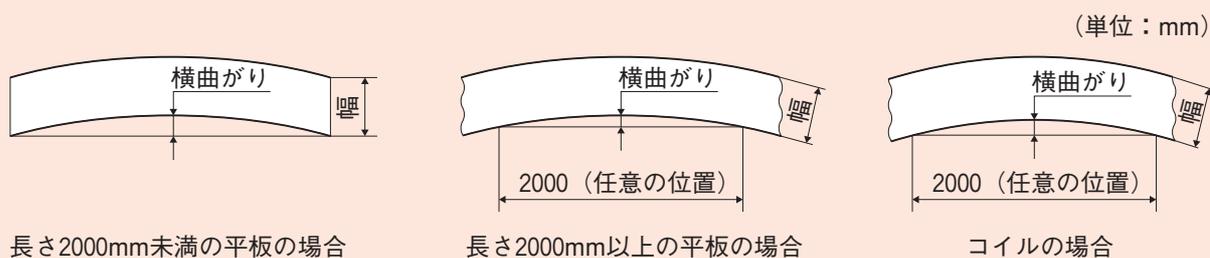
## 《改正後》

JIS番号	適用	種類の記事	塗装原板の種類の記事
JIS G 3312	絞り用 1種	CGCD 1	SGCD 1
	絞り用 2種	CGCD 2	SGCD 2
	絞り用 3種	CGCD 3	SGCD 3
JIS G 3318	絞り用 1種	CZACD 1	SZACD 1
	絞り用 2種	CZACD 2	SZACD 2
	絞り用 3種	CZACD 3	SZACD 3
JIS G 3322	絞り用	CGLCD	SGLCD
	深絞り用	CGLCDD	SGLCDD

3. JIS G 3302において新めっき付着量Z14を規格化したことを受け、JIS G 3312においても原板としてZ14を追加しました。

4. 幅及び長さの許容差に関して、マイナス側の許容差を必要とする市場ニーズが増えてきたことから、許容差範囲は従来のままとし、且つ、許容差の上限値はゼロを下回らないことを条件に、マイナス側の許容差を受渡当事者間の協定によって適用できることにしました。

5. 横曲がりの定義を明確にするため下図を追加しました。



# 金属の質量—MACHINE HEAD—

設計 前田紀貞、担当 武藤圭太郎 / 前田紀貞アトリエ一級建築士事務所

「金属の質量—MACHINE HEAD—」は、2008年4月に東京都町田市に竣工した、スタジオ付き住宅である。

## 敷地状況

敷地は最寄り駅から程近い住宅地で、周辺は起伏が多く、東西で3mの高低差がある。敷地は幅員4mの西側道路に接し、第1種低層住居専用地域、防火指定法22条地域高度地区、第1種高度地区に属しており、建蔽率の上限は40%である。

## 設計条件

施主は夫婦2人である。ギタリストである施主が仕事場として利用するスタジオと、生活空間の2つの空間が一体となる事が望まれた。「とにかく明るく、風通しが良い」ことが施主の要望であり、空間のイメージは設計者の自由な提案に任せられた。

## 配置計画

建蔽率の上限が40%であるため、60%の外部空間をいかに使うかが課題であった。建物と外部空間が別々に存在するのではなく、敷地全体で一体となる事が意識されている。

また、3mの高低差によって上下に2種類の平坦な場が生じている。道路と接する上部にはアプローチと駐車場が、下部には建物のボリュームの周囲にぐるりと庭が配置されている。

## 外観

外観はギターの「マシンヘッド（先端部の調弦用ペグ）」をイメージした金属塊が、崖の上に浮いた形態をしている。

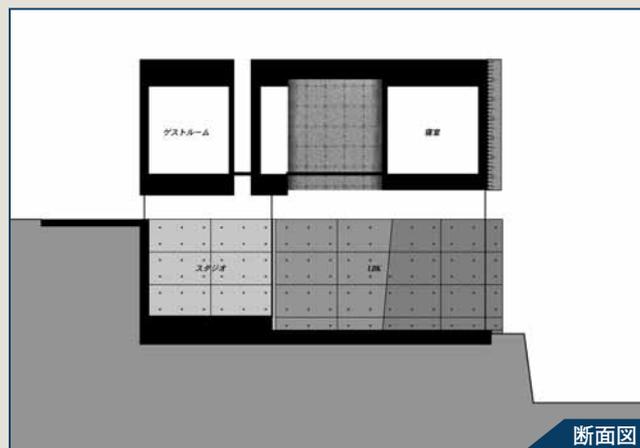
金属塊のボリュームは全面に正方形の無塗装ガルバリウム鋼板がビス留めされている。方向性を持たせないで耐久性のある葺き方を、現場で職人と共に模索していく中で、正方形をビス留めする構法を開発した。ビス留め部分にはパッキンを使って雨仕舞をしている。

金属塊の下部は周囲にガラスを回して室内としており、ピロティのように外部空間と一体となった開放的な空間となっている。

## 平面計画

敷地の特徴から平面、断面が決定された。2階は眺望が良いうえ、プライバシーが守られているので、寝室とゲストルームを配置した。切り込むように空けられた2箇所のスリットは1階へ光を導いている。更に、2階の諸室はスリットによって迷路状に分断されており、それぞれが良い風景を切り取るように開口が設けられている。

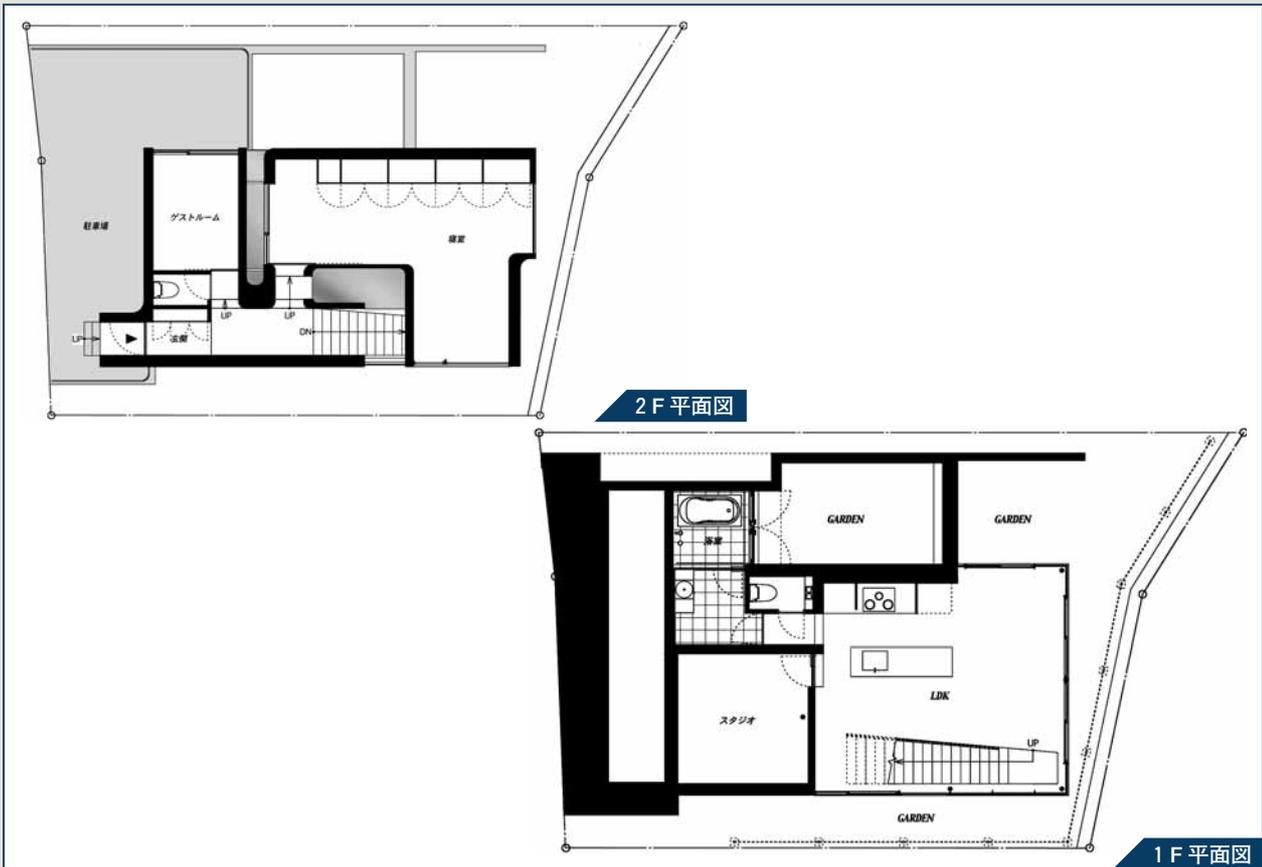
2階のボリュームを道路から持ち上げたことで1階は天井高が4mとなっており、周囲にガラスを回して外部空間のような開放的な場とした。1階は施主が音楽を創るスタジオ、家族が集まるLDK、洗面室、浴室である。



断面図



夕日に映える外観





スタジオよりリビングをみる



階段からみるガラス・フロア



1F天井



夜景

## 内部空間

道路から崖を見下ろした時に外部空間が広がっているような場所にしたかったという。

そのため、1階と2階の空間の雰囲気は対称的に全く異なったものとなった。

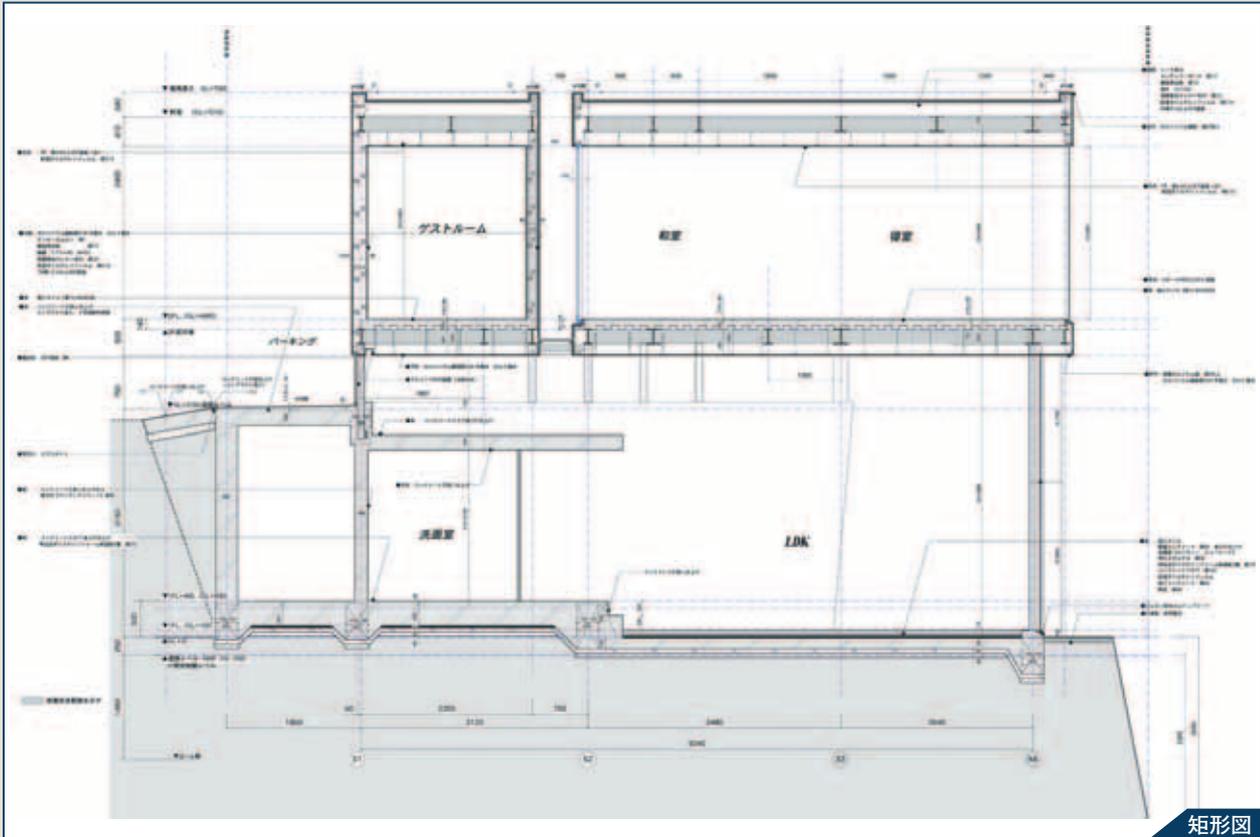
2階はボリュームの内部で閉鎖的ではあるが、スリットから光を導き、気持ちの良い風景だけを開口で切り取って、柔らかい空間とした。スリットに差し込んだ光はガルバリウム鋼板の壁に反射して、朝日や夕日などの時々の風景を室内にもたらしめている。

1階はボリュームの下部にあたり、開放的ではあるが荒々しい空間とした。天井は外壁と同様に正方形のガルバリウム鋼板をビス止めしている。天井のガルバリウム鋼板を強調するために、市販の照明器具をガルバリウム鋼板と同色で塗装し直して、照明器具が目立たなくしている。

夜間は間接照明を用いて天井を照らし、空間の中で金属塊のボリュームの存在感を際立たせている。



寝室からみた街並



## ✕ 構造上の特徴 ✕

1階部分はRC造、2階部分は鉄骨造となっている。建物の水平力と垂直力を明確に分割するという発想に基づいて、RC壁では水平荷重を、4本の鉄骨柱では垂直荷重だけを受け持っている。鉄骨柱は100φの無垢材を使用している。極限まで細くすることによって、鉄骨柱の存在感は薄められている。

## ✕ 設計者のファインスチールに対する考え方 ✕

本物件では、外壁だけでなく内壁や天井の仕上げ材として無塗装ガルバリウム鋼板が使用されている。50種類ほどの様々な金属サンプルを検討した結果、コスト、耐久性、加工性の面でガルバリウム鋼板が適していた。曲面部分や端部のディテ

ールでは高度な施工精度が要求されるため、加工性は重要であったという。

一方で、ガルバリウム鋼板には素材を生かした製品は少ないと感じている。質感や生地を生かしながら色や模様の種類が増えていけば、金属であることを生かした意匠の幅が広がるだろうということであった。

また、本物件は、風景を写し、曲げられた外壁・天井により光の変化を楽しむといったガルバリウム鋼板の新しい使い方の提案でもあるという。

## ✕ 最後に ✕

本物件では、金属板が熱変形して歪むことを一つの経年変化の姿として想定しているという。経年変化によって歪んだ金属板に映りこむ光が今後、どのように変化して周囲の自然と調和していくのか興味深い物件だった。

設計：前田紀貞、担当：武藤圭太郎／前田紀貞アトリエ一級建築士事務所

住所：東京都狛江市和泉本町1-9-5 グラスハウス1F TEL：03-3480-0064 FAX：03-5438-8363 E-mail:norisada@sepia.ocn.ne.jp URL:http://www5a.biglobe.ne.jp/~norisada/

レポーター：東京理科大学大月研究室、松井 溪 (M1)、佐藤 多恵子 (M2)

### 1 折板葺〔せっぱんぶき〕

鋼板かアルミニウム板をVまたはU字形に折曲げ加工した屋根材を折板といい、折板で葺いた屋根を折板葺といいます。折板を「折版」と書くこともありますが、折版は本来鉄筋コンクリートでV字状に作られたコンクリート版(スラブ)の呼び名です。

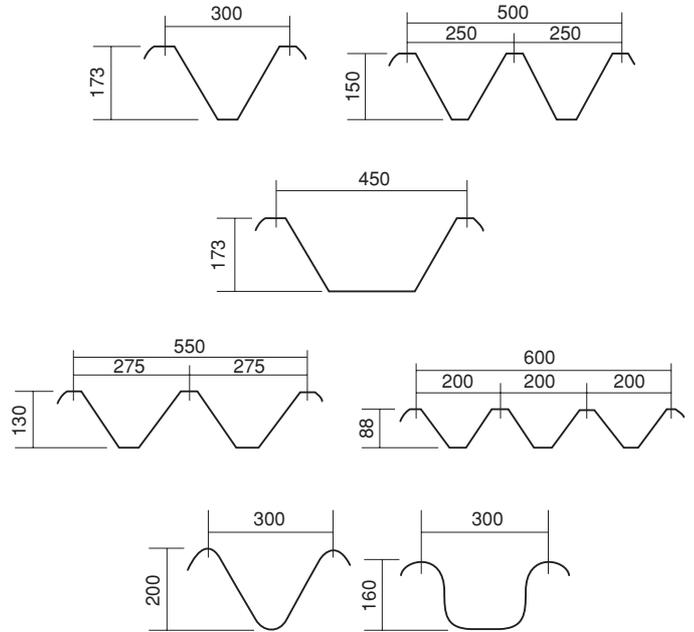
ところが折板に版を用いることは、商品名とした場合の固有名詞と解釈しますとあまり抵抗感がありません。

また、「せっぱん」という読み方は1977年に発行された「鋼板製屋根構法標準」によってオーソライズされています。このほか「せっぱん」、「おりいた」さらには「おればん」と読む人もいます。

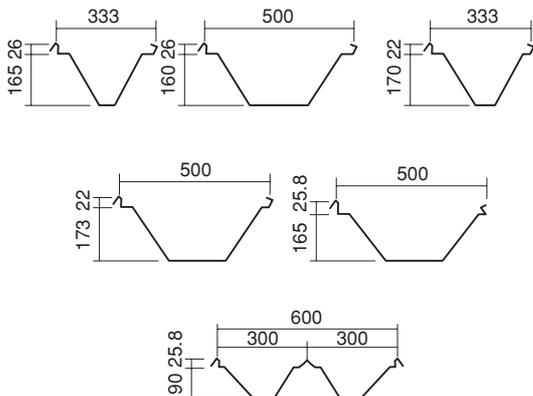
なお、折板の一部の形状寸法のをルーフデッキと呼ぶことが一般化しています。

規格としてはJIS A6514に「金属製折板屋根構成材」(1990年)があります。この規格は1977年に「鋼板製屋根用折板」として最初に制定され、その後1985年に改定され「鋼板製折板屋根構成材」となり、現在の規格は3回の改定を経たものです。

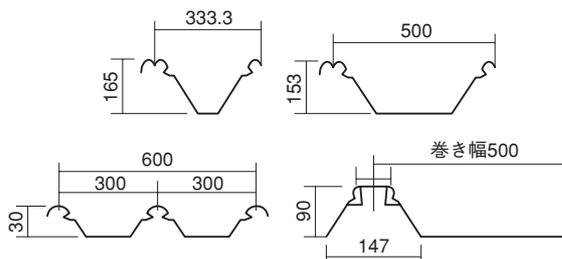
規格によれば、山の高さは80mmから210mmで、山と山の間隔は190mmから520mmの範囲となっています。また板の厚さは0.6mm以上とし、上限は定められていませんが、通常最大の板厚は1.6mmです。



重ね形折板



馳締め形折板



嵌合形折板

さて、折板は1936年にデビューしました。当時は厚さ1.0mmの屋根はほとんど例がなく、加えて母屋が不要ということは画期的なことでした。当初の折板は、V形で山高173mm、山間隔は300mm、互いに隣り合った折板はボルトで綴り合わされる工法で、JIS規格の分類でいえば「重ね形折板」でした。

その後、山高が低い150、130、88mmなどの折板が登場しました。一方、山間隔も1山で450mmのものも出現しました。この重ね形折板は、綴り合わせたボルトの腐食、ボルトのコスト高、作業者が屋根の下側に必要で、作業能率と安全上の問題がある、などの欠点から考えられたため「馳締め形折板」です。

このタイプは1973年に実用化されました。ただ、北海道では瓦棒の馳組を利用した馳折板が1971年頃に開発されています。現在の馳折板の主流は、山間隔が500mmで、山高160mmのタイプです。馳折板の馳は、各社により少しずつ異なっています。馳締めは専用の馳締め機で行いますが、馳形状が違ふと当然馳締め機も変わります。

一方、屋根の施工にも労働者不足が深刻になり、作業の省力化が考えられるようになり、その結果「嵌合形折板」(かんごうがたせっぱん)が出来ました。このタイプは馳締め作業を省略しようとするもので、馳掛けまたは板のスプリングバック性を利用して組みあがるものです。これから本格化する形式と思われます。

## 2 段葺〔だんぶき〕

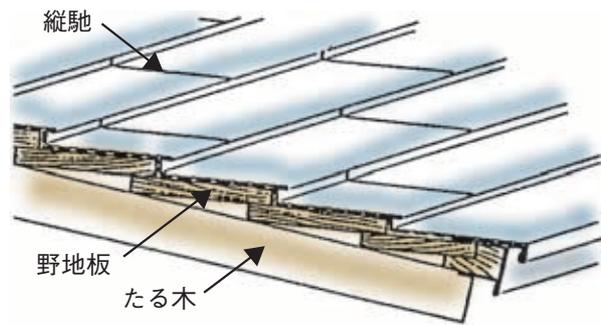
屋根の葺き方の一種で、葺き上がると屋根面に水平な段状の線が入ります。現在よく見掛ける「横葺」は、この段葺が原形といえます。

段葺は、野地板を段状に設け、その形に沿って金属板で葺き上げます。段の高さは15ないし24mm、段と段の幅は120から200mm程度とします。

施工法は、一文字葺の方法を応用するので、一文字葺の一種ともいえます。

段葺が何時ごろから葺かれたかは不明ですが、古いと思われる事例に東大寺大仏殿の唐破風屋根があります。それから推定すれば、少なくとも唐破風が設けられたのは元禄年間1692年です。しかし、当時段葺に用い得る厚さの銅板はないので、その後の明治36年、1903年から大正2年、1913年の修理時に今の段葺となったと思われます。

この工法を銅板で葺くことはかなり困難で、やはり板が柔らかい銅板が適している工法です。図は段葺の工法を示しています。



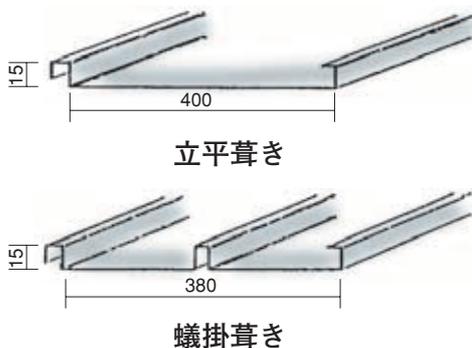
### ところで、

唐破風屋根のような複雑な曲面からなる屋根は、一文字葺では雨漏りの危険性が高いので、いろいろ考えた挙句段葺としたものとも推測されます。さらに大仏殿のような大型の建物では一文字葺の横線ではいかにもか弱く見えますが、段葺であれば線が強調されて外観は丁度よいバランスとなることも計算に入っていたとも思えます。先人の知恵に改めて感心します。

## 3 立平葺〔たてひらぶき〕

立平葺は長尺板を用いた屋根工法の一つです。瓦棒葺に少し似ていますが、瓦棒がありません。瓦棒に相当する部分は左右の屋根板を互いに立ち上げ、その上部に馳を設けて組み合わせる方法となります。

立平葺は欧米でも存在する工法で、英語で Standing Seam Roofing といいます。形状は図のような状態で構成されます。

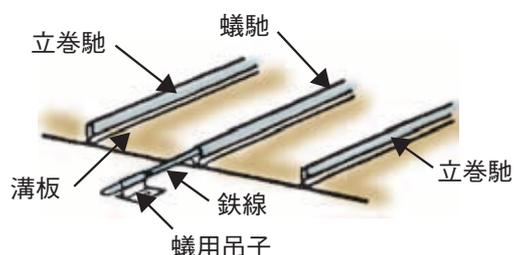


### ところで、

ファインスチールの屋根（金属屋根）が普及している東北地方では施工性と意匠の良さから圧倒的に横葺が使用されていましたが、雨じまい（雪じまい）の良さと風に対する強さから日本海側の地域で立平葺が最近見直されています。立平葺の強さを増すために、馳と馳の間にもう一つの特異な馳を設けた工法が蟻掛葺といい北海道地方で多く使用されています。

## 4 蟻掛葺〔ありかけぶき〕

立平葺の風に対する耐力の向上を意図して考えられた屋根葺構法の一つです。見方によっては、改良型立平葺ともいえます。この構法は、比較的成本がかからない利点があります。以前は全国的に葺かれたものですが、最近は北海道を中心に立平葺とともに広く利用されています。





282

東京大学生産技術研究所  
藤森研究室

担当：ソレマニエ 貴実也

# テヘラーンの バーザールに建つ住宅 扉を叩く③

今回はイランの首都テヘラーンの大バーザール南に位置する住宅を訪ねることにする。

現在この住宅はバーザーレー・アンティークという商業施設として知られているが、私が初めて訪れた2004年の夏、ここは修復中の住宅であり、その扉には鍵がかけられていた。

テヘラーンはイラン高原北部を横断するエルボルズ山脈の麓に発展した都市である。近年人口の増加と共に水や環境が良好な北部へとスプロールし、人口1,100万人を超える都市はエルボルズ山脈に張り付くように成長している。

この中20世紀初頭までの旧市街は都市の遥か南、バーイーネーシャハル(ダウントウン)に取り残されているかのように見える。

テヘラーンが都市として歴史上に登場するのは、サファヴィー朝(1501-1736年)第2代君主シャー・ターマースプの時代である。また首都に選定されるのはその約200年後、ガージャール朝(1796-1925年)に入ってからである。それ以前のテヘラーンは住民が地下に竪穴を掘って暮らしていた農村に過ぎなかったとも言われている。

シャー・ターマースプはテヘラーンに城壁を廻らせ、城壁南辺から都市の中央に向けて、商業施設を造らせ、バーザールの原型を建設した。その後ガージャール期にはこのバーザールが整備され、その規模も拡大された。

2004年私は研究室のメンバーを始め千年持続都市研究一行とテヘラーンの旧市街中心に位置するバーザールを訪れ、ここに建つ隊商宿＝サライの調査に明け暮れていた。

休憩時間、あるサライの管理人と雑談をしていると、「よし俺がいい

ものを見せてやる。」と連れて行かれたのが、バーザール西の絨毯街南、ハフトタン通りの住宅であった。通常路地からその姿を確認することが出来ない、イラン中部の中庭式住宅であるが、ここは中庭の半分が街路に取り込まれ、中庭短辺に配されていたであろう広間の立面が露出していた。

広間前面の有蓋テラス・イーワーン左右には柱頭に唐草模様が施された石柱が三本一組となり、張り出した天上を支え、外壁には歴代君主達を描いたタイルがはめ込まれていた(図1参照)。イラン高原中部の建築には主に日干し煉瓦が使われ、木材は建具や一部天井の梁などに使われるのみである。まして一般住宅に石材を使用した例は19世紀までほとんど存在しない。

では、何故ガージャール期の住宅に石柱が登場するのであろうか。

19世紀半ばイランはイギリス、ロシアを初め西欧諸国の緩衝地帯となり、多くの利権を売却し、数々の不平等条約を結ばされた。一方市民の間では国民国家成立を目指し、イランナショナリズムを掲げる運動が始まり、宗教指導者や商人が活躍した立憲革命へと繋がっていった(1906-11年)。建築ではこの時代、西洋的要素に加わり、イラン的要素を求め、古代復興的モチーフが好んで用いられた。

その拠り所は、古代ペルシャ帝国の遺跡ペルセポリスであった。ペルセポリスは紀元前6世紀に西アジアを支配したアケメネス朝ダarius 1世(紀元前522-486年在位)によって築かれた宮殿群と宗教的祭祀場からなる都市であった。石材を用い巨大な柱を建てるその建築様式は、古代ギリシア文明を連想させる。しかしこの都市の



図1 ハフトタン通りの住宅イーワーンと柱



図2 ペルセポリス遺跡

栄光はその後ギリシアのアレクサンダー大王の遠征によって途絶え（紀元前330年）、焼き払われてしまう。そして遺された石柱と基壇が2300年以上もの間過去の栄光を伝え続けている（図2参照）。

19世紀中頃影響力を強化しようと努める西欧の大国に、過去の栄光の断片をもって対抗しようと考えたのがペルセポリス復興主義であり、現存するペルセポリスの断片・石柱はこれの象徴的存在であったのであろう。

イーワーンに設けられる柱（もしくは柱列）のほか、扉を叩いて①で紹介した住宅の門構えにも古典的モチーフが使用された。

そしてこれは西洋の新古典主義と呼応し、19世紀イランの新たな建築意匠として大いに歓迎された。

この住宅の柱も当時の流行を示すものであり、このほかテヘラン旧市街をはじめ地方都市においても数多くの事例を見ることが出来る（図3、4参照）。



図3 テヘラン旧市街の住宅の門



図4 カーシャーン、サーレ邸イーワーン  
1800年代後期、  
筆者修士論文より

さて本日の住宅に話を戻そう。案内人はしばらく我々を待たせた後、何処からか鍵を持ち出し、石柱が並ぶイーワーン脇の側室の扉を開放してくれた。

内部の間取りは、中央広間と左右の側室、そして側室背後の部屋であり、側室には中央広間が見下ろせる2階が設けられていた。

通常邸宅の広間は中庭方向に5連もしくは7連の建具を備え、5連の間（パンジ・ダリー）、7連の間（ハフト・ダリー）と称される。この広間は後者であり、現在修復の際新たに設けられた、1枚板のガラス窓が7組連なっている。大邸宅の場合、広間奥に窪みが設けられ、華やかな装飾が施される。この窪みは、「シャー・ネシーン＝王の座」と呼ばれ、部屋の上座に値する（図5参照）。

住宅内では履物を脱ぎ、部屋一杯に敷き詰めた絨毯の上に、胡坐をかいで座るのがイラン流である。おそらくシャー・ネシーン奥にはモハットと呼ばれる絨毯製のクッションが置かれ、これにもたれて客は水タバコと紅茶で持て成されたのであろう（現在は机と椅子が置かれている）。

側室2階にはオリジナルの引き上げ式木製建具が残されていた。これ等はオロスィーと呼ばれ、色ガラスと木枠を組んで作られた窓そしてこれを収納する建具から成るものであり、当時の住宅では一般的なものであった（図6参照）。

最初の訪問では所有者であるという人物には会えず、修復を担当している職人に簡単なインタビューをして終了した。

そして2006年再度バーザールのハフトタン通りを訪ねた。そこは、靴と履物のサライとしてオープンしていた。立派な広間のシャー・ネシーンにはオーナーが堂々と座っていた。

彼はイラン北西部タブリーズ訛りでインタビューに応じてくれた。



図5 ハフトタン通りの住宅シャー・ネシーン



図6 同住宅広間側面と2階の建具

修復に至った経緯を尋ねると「ここが気に入ったから購入し、修復して使用することにした。」と答え、なぜバーザール・アンティークと言う名で靴など日常的なものを扱っているのか?という質問に「建物がアンティークだからさ、土産屋などにする気は無い。」と答えた。

お金社会と合理主義の今日、バーザール内の個人住宅や物件はより収益の高いショッピング・モール（ペルシャ語でパーサージ）に改修される傾向にある。こんな中オーナーのあまりの欲の無さに感動し、シャー・ネシーンに座っている彼が少し神々しく見えた。



# 北海鋼機株式会社

人と人、心と心をつなぎゆたかな未来を創造します。



## 1. 北海鋼機とは

昭和36年の発足以来、40有余年にわたって関東以北唯一の鉄鋼二次製品の総合メーカーとして、着実に歩んでおります。

長年の技術と経験により主力製品となっています鋼板製品は国内はもとより、金属サイディング等建材加工製品の製造販売においても幅広くご愛顧を頂いております。今後とも、新しい技術や製品開発に努力し、未来づくりの一翼を担えるよう、全社をあげ邁進致します。

## 2. 北海鋼機の製品

北海道の厳しい自然環境の中で育まれた「雪印カラー鋼板」の性能と信頼。そのカラーコイルからサイディングの製造まで、一貫した生産工程で製造される「雪印サイディング BS」  
シャープな斜線を施したブリック柄が、太陽の光を受けて単色の外壁に陰影を醸し出す個性溢れた金属サイディングです。

また、時代のニーズに合わせ、モノトーン色の新色商品もラインナップしました。





【雪印サイディング BS：N イエロー】



### 3. ファインスチールの使用について

当社では、金属サイディングはもとより、雪印カラー鋼板（GI、SZ、GL）にも幅広く採用しており、北海道内において幅広くご愛顧を頂いております。



【雪印サイディング BS：N シルクベージュ】

北海鋼機株式会社 営業第二部

〒060-0002 北海道札幌市中央区北2条西4丁目  
TEL(011) 231-5675 (札幌営業所)  
URL : <http://www.hkoki.co.jp>

ファインスチール教授、  
屋根について考える。

屋根を考える人は、  
いのちを考える人。  
安全・安心の金属の屋根、  
ファインスチール。



本誌の“誌面充実”にあたり、下記ホームページで  
インターネットによるアンケートを実施しています